

目的のない手段としての思考

—ジョルジョ・アガンベン の議論に着目して—

基礎教育学コース 寺道亮信

Thought as Means Without End

—Focusing on Giorgio Agamben's Thought—

Akinobu TERAMICHI

This paper, taking up Giorgio Agamben's concept of "Thought", aims to rethink on to think, which has been regarded exclusively as a means to some ends in many education scenes. "Thought" has much significance on Agamben in contact with other concepts of Language, Potentiality and The Coming Politics. By the study of "Thought", we finally suggest the idea that thought itself could be regarded as a "gesture", a pure means without end reveals our "be-in-language".

目次

- 1 はじめに
- 2 言語活動と思考：分節の思考から接触の思考へ
 - A 分節の思考：声を見出したいという希望
 - B 接触の思考：詩と哲学の決定的な瞬間
- 3 思考の潜勢力：潜勢力と現勢力の関係なき関係
- 4 身振りとしての思考：到来する政治の主導概念
- 5 おわりに

1 はじめに

本稿の目的は、イタリア現代思想をなお牽引するジョルジョ・アガンベン (Giorgio Agamben, 1942-) における「思考 (pensiero)」概念の検討を通じて、「考える」という所作を改めて考えるための視座を提示することにある。

多くの教育現場において、「考える」というのはもっぱらその能力の向上が目指されるものである。教材や教授法、カリキュラムの開発では「論理的思考力」や「批判的思考力」といった思考力の「育成」が課題とされ、新学習指導要領の指針 (2015年) において思考力は「問題解決力」に近似して定義されているように、依然として教育は思考を「(問題解決や有能性という) 目的のための手段」に位置付け、学習者の思考のポテンシャルを引き出す、潜勢力 (potentiality) を現勢化 (actualize) することを主眼とする向きが強い。

一方、単に思考力の向上を目的とするのではなく、

考えることそれ自体に重きを置く「こどものための哲学 (Philosophy for / with Children)」の研究が昨今著しく、学校現場に加え様々な施設で実践する動きがある (鷲田・高橋・本間 2018)。その方法や目的は一枚岩ではなく実践者によって多様であり、それがむしろ理念にも適合的なのだが、今後一層普及していくに当たり、それらが一義的に設定される危惧もある。

双方を一瞥して対比的に並べるのは適切ではないだろうし、様々な観点や方法に基づく思考を分類することが本稿の目的なのでもない。本稿は、より原理的に「考える」を考える準備として、アガンベンの思考概念に焦点を当てるのである。

教育学におけるアガンベン受容の状況を確認すれば、小玉重夫はシティズンシップ教育の観点から「非の潜勢力 (impotenza)」に着目し、「無能性」をキーワードとして論じている (小玉 2010, 2013)。小野文生は経験概念の問い直しから「パティ・マトス」や「インファンティア」に着目し、アガンベンの思想をパトス論として再文脈化している (小野 2021)。Lewis や Jasinski らアメリカの教育哲学者は、網羅的にアガンベンの著作を参照しながら注目すべき概念を取り上げ、各々「無為の学習/学習を働かなくする (Inoperative Learning)」 (Lewis 2018)、「苦心する (Studious) 教育哲学」 (Jasinski 2018) といった教育思想を銘打っている。

以上のような動向のなか、本稿で取り上げる「思考」はあまり注目されてこなかった¹⁾。これから見ていくようにアガンベンは思考という言葉を経験的な文脈で用

いているが、本稿では「考える」の問い直しという目的に応じて、各章につき便宜的な問いを念頭に置くことにする。はじめに、アガンベンにおける思考とは何であるのか（whatの問い）を、「言語活動」の観点から論じる（第2章）。続いて、そのような思考はどのように起こるのか（howの問い）を、「潜勢力」の観点から論じる（第3章）。最後に、アガンベンが思考を（特に政治哲学において）重視する所以を確認することで、考えることはなぜ大切なのか、本当に大切なのかという思考に関する根本的な問い（whyの問い）に対する示唆を引き出す（第4章）。

2 言語活動と思考：分節の思考から接触の思考へ

本章では、言語活動の観点から「思考」に焦点を当てる。先に要約を述べれば、言語活動が存在するという事実を前提とする伝統的な哲学的思考から（A節）、言語活動との正面からの対決を通して、分節を伴わない接触の思考へ（B節）という道筋を把握する。西洋哲学において常に働いてきた「存在論的装置」——アリストテレスの存在論を定義している存在の分割装置——の停止というアガンベンの思想に一貫したテーマを思い起こせば、本章の意義が理解されよう²⁾。

A 分節の思考：声を見出したいという希望

アガンベンが1982年に発表した『言語活動と死』（邦題『言葉と死』）は、副題が示す通り「否定的なもの場所と構造に関する問い」を探究した著作である。西洋哲学の伝統において、人間は「死すべき存在であると同時に言葉を話す存在」として規定されてきたが、アガンベンの見立てでは「言語活動の「能力」も死の「能力」も、それらは人間にもっとも本来的な住処を開くものであるかぎり、この住処がつねにすでに否定的なものによって横断されており、否定的なものによって根拠づけられている」。ここで「否定的なもの」とは、「根拠を欠いた」という根拠の非一場所（つまりは無）であり、西洋形而上学においてはまさしく根拠が無いということが根拠になっているのである。アガンベンはこの否定的根拠の構造が、彼が〈声〉と呼ぶ場所にあるとし、〈声〉の問題を陳述することを目指す（LM: 3-6=9-14）。

では、アガンベンがいう〈声〉（Voce）とは何なのだろうか。アガンベンが人間の言語活動について思索するとき、常にメルクマールとなる一つの問いがある。「人間の声は存在するのか」というのがそれである。

人間の声は存在するのか。ミンミンというのが蟬の声であり、イーアンというのが驢馬の声であるように、人間の声であるといえるような声は存在するのだろうか。存在するとして、この声は言語活動なのだろうか。音声と言語活動、フォーネーとロゴスとの関係はどのようなものなのか。人間の声のようなものが存在しないならば、どのような意味において人間はなおも言語活動をもった動物として定義されるのか。（IS: VIIIf=2）

ここでアガンベンは、アリストテレス以来の「人間は言語活動をもつ動物である」という定義が抱えるアポリアの状況に注意を払っている。人間の言葉は音声のうちでありながら、音声そのものではない。人間は動物でありながら、動物のような鳴き声をもっていない。

アガンベンは「音声の経験」において、動物の音声（フォーネー）と人間の言葉（ロゴス）の差異に関するアリストテレスの定義が、西洋文化の歴史にとって決定的だったとしている。

フォーネーとロゴス、動物の音声と人間の言葉は相違しているが、局部的に人間のなかでは合致している。言葉は音声の「分節化」を通じて産み出される。そして「分節化」とは音声のなかに文字（グラマタ）が記入されるということ以外のなにものでもないのであって、文字には音声の象徴であると同時に要素（ストイケイア）であるという特権的な身分が属している。（CF: 34=33）

アガンベンによれば、アリストテレスはフォーネーからロゴスを隔てるものを「文字」と考えた。文字は単に音声の象徴、音声を書き写したのではなく、それによって音声を意味表示的で理解しうるものにする、すなわち「分節化」する「ストイケイア」なのだ。この定義は古代の文法学者に引き継がれ、動物の「不明瞭な音声」に対して人間の言葉は「分節化された（明瞭に発声された）音声」として区別される。さらに、アガンベンは政治における「包摂的排除」——人間の自然的な生がそれ自身を剥き出しの生のかたちで排除することを通じて政治のなかに包摂される——の構造と重ねて、人間の言葉は「剥き出しの音声」を言葉のなかに排除＝包摂することを通じて生起する、と述べる（CF: 34-35=33-34）。

この、動物の音声に文字を書き込むことで意味が生

起する「分節化」を可能にする場所を、アガンベンは〈声〉と名付ける。

音声の除去と意味の出現とのあいだにあっての言語活動の生起は、その存在論的・論理的(onto-logica)次元が中世の思想のなかに出現するのを先に見たもうひとつの〈声〉である。そして、それは形而上学の伝統のなかで人間による言語活動の本源的な分節を構成しているのである。(LM: 48=92f., 強調省略)

音声の除去と意味の出現のあいだ、すなわち〈声〉は「もはや音声でないとなお意味でない」という二重の否定性をもっているかぎり、「必然的に否定的な次元を構成している」。言語活動に関する西洋伝統の省察において、人間の音声を言語活動において分節するものは「純粹の否定性」にほかならないのである(LM: 49=93)。

このとき問題になるのが、〈声〉によって人間の言語活動は可能となるが、言語活動が生起する瞬間、すなわち動物の音声が人間の言葉へ分節される瞬間を、言葉は言い表すことができないということである。しかしながら西洋哲学は、まさしくこの「言語活動の生起そのもの」をつかまえようと試みてきたのだった(LM: 82=154)。(実際、『言語活動と死』ではヘーゲルとハイデガーを主要検討対象とし、両者にも〈声〉の思想が見出されると論じるのだが、本稿では立ち入らない。)

先に示した「人間の声は存在するのか」という象徴的な問いは、「言語活動が存在する」とはどういうことなのか、「わたしが語っている」とはどういうことなのか、という意味でもある(IS: X=6f.)。西洋文化においては「言語活動が純粹かつ単純に存在しているという事実」——ファクトウム・ロクエンディ——についての思考が放置されてきた(CF: 44f.=47f.)。アガンベンは、言語活動が存在することを前提とする西洋伝統の思考に代わる、新たな思考へ至ろうとしている。人間の言葉を「分節化された音声」としてでない仕方でも思考する可能性を考えている。

以上のような一貫した問題関心の下、〈声〉の思想との訣別を随想的な文章で謳った³⁾のが、『言語活動と死』のエピローグに置かれた「思考の終わり(La fine del pensiero)」である。アガンベンはあらゆる自身のテキストを「ルドゥス(本奏)が不在のポストリユード(後奏曲)以外のものではない」(CF: 131=171)と述べているが、このエピローグは本文の

内容を反復している。本稿の観点から注目されるのは、彼が思考を「声が言語活動のなかで未決定の状態にあること」(LM: 137=248)と表現していることである。

アガンベンによれば、イタリア語における「思考(pensiero)」という言葉の語源は、「未決定の状態にあること」を意味するラテン語動詞のペンデーレ(pendere)である。思考において、言語活動のなかで「未決定の状態にある」ものとは「声(voce)」⁴⁾である。先に見たように、人間の言葉は剥き出しの音声を排除＝包摂することで生起するのであり、わたしたちが思考することをなすのは、「言語活動がわたしたちの声であると同時にわたしたちの声でないから」である。それはすなわち、わたしたちが思考するのは「言語活動のなかでついに声を見出したいと希望している」から、ということの意味する(LM: 137-138=248-249)。

アガンベンはこのような「思考」の終わりをいうのである。西洋文化を覆ってきた、動物の音声と人間の言葉の分節に基づく思考、否定的根拠に基づく〈声〉の思想である。言語活動の生起をつかまえようとする哲学の思考である。

それゆえ、逃走、言語活動のなかにあっての声の未決状態には、終わりがなければならぬ。わたしたちは言語活動ならびに声を未決の状態に保ったままにしておくことを停止させることができる。(LM: 139=251)

それでは、伝統的な思考が終わりを迎えたとき、あるいは宙吊りにされたとき、われわれが向かうべき道筋はあるのだろうか。アガンベンは『言語活動と死』の段階では、「思考がなおもたらねばならない道は[……]ここではかろうじて示唆することしかできない」(LM: 5=12)と述べていたが、2016年に発表された「音声の経験」では新たな思考のありかたが構想されている。音声と言葉との接触の瞬間としての思考というのがそれである。

B 接触の思考：詩と哲学の決定的な瞬間

アガンベンが1995年の『ホモ・サケル』以来、20年にわたって取り組んできた《ホモ・サケル》プロジェクトは、シリーズ最後のナンバリングを付された『身体の使用』(2014年)によってひとまず完結した。もっとも、彼の言葉を借りれば「その探究は、他のあらゆる詩作と思索の仕事もそうであるように、けっして終

結することはありえないのであって、ただ放棄されうる」(UC: 13=1f.)に過ぎないとしても、何の展望も示されていないわけではない。これもまたエピローグにおいて、「脱構成的潜勢力 (potenza destituyente)」というアイデアが提出されているのである。

アガンベン思想においては、参照されることの多い政治哲学の文脈でいえば、アリストテレス以来のデュナミス (潜勢力) / エネルゲイア (現勢力) の区別およびエネルゲイアの優位に基づく、包摂的排除、主権的締め出しの構造によるのではない政治を構想することが目指されていた。そして前節で見たように、とりわけ『ホモ・サケル』以前の1980年代、アガンベンは「言語活動が存在するとはどういうことなのか」という問いを通して、「分節化」という形態による西洋形而上学の思考を問いに付したのだった。同様に脱構成的潜勢力を思考することは、言語活動との接近戦に挑むことを意味する。

[……] 純粋に脱構成的な潜勢力なるものを思考することは、関係の身分そのものを問いに付し、存在論的關係がほんとうには関係でないような可能性に対して開かれた態度をとり続けていることを意味する。このことは、言語活動というこの上なく脆弱な存在と正面から対決して決定的な接近戦を行うことを意味する。(UC: 369=453)

純粋に脱構成的な潜勢力——「それを構成された権力に結びつけている主権的締め出しの関係から全面的に解き放たれた潜勢力」(UC: 365=447) ——を思考するヒントとして、アガンベンは同じくイタリアの哲学者であるジョルジョ・コッリを参照する。

もろもろの存在論的—政治的關係をそのつど廃棄してそれらを構成している要素のあいだに接触 (ジョルジョ・コッリのいう意味において) を出現させることのできる力をもった潜勢力を脱構成的潜勢力と呼ぶことにしよう。その接触 (contatto) は、接点でもなければ、二つの要素がそのなかで交信しあう実体のようなものでもない。それは表象の不在によってのみ、句切れによってのみ、定義される。(UC: 371=455)

コッリは「接触」という概念を、アリストテレスが思考活動を「ティゲイン (thigein) = 触れること」(思考はその極点では可知的なものを表象するのではなく

て、それに「触れる」)と特徴づけたのを発展させ、「二つの存在者が表象の空虚によってのみ切り離されている《形而上学的間隙》ないし瞬間」と定義する。接触は接点でも実体のようなものでもなく、二つの要素は「ひとつの関係なき関係 (non-relazione) のなかに住まう」(UC: 327=397)。

この接触の概念が、詩と哲学という人間の言語活動と直接的に関連づけて参照されているのが、「音声の経験」というテキストである。2016年出版の『哲学とはなにか』に収められたそれは、アガンベンによれば1980年代後半の覚書を「ふたたび取り上げ、新しい方向に向かって発展させ」たものである (CF: 7=2)。

ここでアガンベンは、プラトンが《昔からの不和》と呼んだ詩と哲学が対立並存する状況は、「動物の言語活動であり続けているものと、それに代わって知と認識の器官として構築されつつあった言語とのあいだの分裂を証言している」という。『言語活動と死』において西洋哲学の伝統的な思考を批判したアガンベンは、ここでも動物の音声の排除=包摂による言語活動の生起という分節化の構造、および詩と哲学を言語活動の両極とみなす「わかりやすい読解」を批判する (CF: 42-43=45-46)。そうではなく、「[詩と哲学の] どちらにとっても、音声と言葉、音と意味が接触する瞬間こそが決定的である」(CF: 43=46, □内引用者)。この「接触」とはコッリがいう意味においてであり、アガンベンはその瞬間を「思考」と呼ぶことを提案している。

[……] ジョルジョ・コッリにならって、接触を接点としてではなく、二つの存在するものが表象作用の欠如していることによってのみ結びつく (むしろ切り離される) 瞬間として理解するとしてである。もしこの接触の瞬間を思考 (pensiero) と呼ぶとするなら、そのときには、詩と哲学はそれぞれが相手のなかに在る、ということができる。(CF: 43f.=46f., 強調原文)

「音声の経験」が「なんらかの仕方て本書のタイトル『哲学とはなにか』の問いに答えたもの」(CF: 7=1)であることを考えれば、アガンベンは詩と哲学を対立させた伝統的思考ではない、「音声と言葉、音と意味の接触の瞬間」としての「思考」を、哲学が行うべき思考として提示しているのである。そうであれば、『言語活動と死』では道半ばだったアガンベンが、《ホモ・サケル》プロジェクトの破棄を通じて、新たな思考のありかたを提示したともいえるだろうか。

3 思考の潜勢力：潜勢力と現勢力の関係なき関係

前章では、「言語活動が存在するとはどういうことか」を問い続けるアガンベンが、アリストテレス以来の「人間は言語活動を持つ動物である」という定義が孕む分節化の構造を批判し、音声と言葉の架橋を試みるのではなく、音声と言葉の接触としての思考を提示したことを見てきた。

本章では、そのような思考はどのように起こるのかという問いを背景に、「潜勢力 (potenza)」⁵⁾の観点から思考を論じる。存在の分割を批判するアガンベンにとって、思考という人間の所作——伝統的には人間を人間たらしめる営為——は、潜勢力/現勢力という図式には収まらない仕方と考えられるはずである。事実、アガンベンは先に見た「音声の経験」において、思考の条件を以下のように述べている。

音声と言語活動がなんらの分節化もほどこされることなく接触しているところに主体がやってきて、この接触を証言する。[……] ラングとパロール、本質存在と現実存在、潜勢力と現勢力のあいだにあって、この経験に身を賭そうとする思考は、そのつど、みずからが音声の前にして言語が存在せず、言語の前にして音声が存在しない状況に置かれていることを受け入れなければならないのである。(CF: 45=49)

それでは、「思考」が位置すべき「潜勢力と現勢力のあいだ」とは、いかなる地帯なのだろうか。以下では「思考の潜勢力」を読解し、アガンベンの潜勢力論を検討する。

「思考の潜勢力」は1987年に行われた講演を元とし、アガンベンの単行本未収録の論考を網羅的に収めた『思考の潜勢力』(2005年)に収録されたテキストである。冒頭でアガンベンは潜勢力という概念を取り上げる理由を、「私はできる」という連辞が何を意味するのかを理解するためであると述べる。

[……] 私は、自分の探求のテーマは「私はできる」という連辞の意味を理解しようとする試みであると言ひ表すこともできる。「私はできる」「私はできない」というとき、私は何をいわんとしているのか？ (PP: 273=332)

講演の題目を考えれば、「思考することができる」とはどういうことか、という問いを浮かべながら読むこ

とも可能だろう。まずは、アガンベンがアリストテレスの潜勢力論をどのように解釈しているかを見ていきたい。

アリストテレスは、潜勢力を二つの形式に区別する。一方は「類的な潜勢力」と呼ばれるもので、例示されるのは赤ん坊である。これは「赤ん坊は知の潜勢力をもっているとか、潜勢力という状態にあっては建築家や国家の長である」といえるように、「習得を通じて自分が変わっていくということを被らなければならない」潜勢力である (PP: 276=336)。つまり、現時点では「することができない」が、習得を通じて「できるようになる」可能性があるという意味である。

もう一方が、「これこれの知や能力に対応する「もちょう (hexis)」をすでにもっている者に属する潜勢力」である。たとえば建築家は、実際に建築していないときにも建築家なのであり、建築する潜勢力をもっているといわれる。建築家は「建築しないことができる」ように、この種の潜勢力は「しないことができる」かぎりにおいて認められる。すなわち、「現勢力は本質的に、その非行使の可能性によって定義されている」。アガンベンによれば、アリストテレスの関心はこちらにあった (PP: 276-277=336-337)。

アリストテレスはこの種の潜勢力の両義性、「することができる」とともに「しないことができる」に関して、後者つまり「現勢力にならない潜勢力」を「非の潜勢力 (adynamia)」と呼んでいる。この種の潜勢力は単にすることができるだけでなく、「しないことができる」ことによってはじめて「することができる」といえるのであるから、「人間的潜勢力はすべて、同時にはじめから非の潜勢力である」 (PP: 280-282=342-344)。

では、潜勢力が同時に非の潜勢力でもあるのなら、「潜勢力はどのようにして現勢力へと移行することができるのか」。また、「非の潜勢力の現勢力をどのように考えることができるのか」 (PP: 283=346)。アリストテレスがこの問いに与えた回答を、アガンベンは「彼の哲学的天分が最も並外れた仕方」で示されているものだと評する。それが『形而上学』第九巻における一節 (1047a 24-25) で、アガンベンは以下のように訳す⁶⁾。

これこれが潜勢的であるのは、潜勢力をもつといわれているその当のものの現勢力が現実のものとなるときに、非の潜勢力という状態では何もなくなるという場合である。(PP: 284=346)

これに対する一般的な解釈は、「これこれについて不可能なものが何もない場合、それは可能的である」という同語反復であった。アガンベンは、アリストテレスがいう非の潜勢力があくまで「しないことができる」であり、「することができない」とは様相 (modality) が異なる⁷⁾ことから、以下のように解釈し直す。

すなわち、現勢力へと移行するときに、自体的な非の潜勢力を単に取り消すのでも、それを現勢力の背後に放置するのでもなく、自体的な非の潜勢力を現勢力へとそのまま全面的に移行させ、つまりは現勢力へと移行しないのではないことができるもの、これこそが真に潜勢力をもっているものである。(PP: 285=348f., 強調省略)

ここでいわれているのは、「潜勢力が当の潜勢力に共属している非の潜勢力を中和する」仕方である (PP: 284=347)。潜勢力が現勢力へと移行するのは、「しないのではないことができる」という仕方——非の潜勢力の「欠如的否定」(PP: 285=348) によってである。このとき非の潜勢力は取り消されず、現勢力のうちに保存される。このようなアリストテレス解釈により、アガンベンは先述の問いに応答するのである。

いまや潜勢力と現勢力の関係は、「非凡な仕方」で考えられなければならない。潜勢力は現勢力へと移行するためのものではなく、むしろ潜勢力は現勢力へと移行するうちに自らを保存し、完成させるのである。

潜勢力 [……] が現勢力へと移行するのは、その潜勢力が破壊されたり違うものになったりすることを被ることによってではない。潜勢力の「被ること (paschein)」はむしろ、自らの保存と完成に存する [……]。(PP: 286=350)

アリストテレスは思考の本性を潜勢力とし、「(神的な) 思考は思考の思考」と考えた⁸⁾が、哲学的伝統は思考についての思考——すなわち「哲学」——が「現勢力の聖典」、人間における最高の働きであるという考えに私たちをなじませてきた。対してアガンベンは、それを「思考の潜勢力の完了した形象」だと考える。

哲学的伝統はそれが思考の頂点であると、また純粋な「現勢力 (energeia)」の聖典であるという考えに私たちをなじませてきたが、それ——思考の思考——はじつは、潜勢力が潜勢力自体に対して行う極

端な贈与であり、思考の潜勢力の完了した形象である。(PP: 287=351)

この含意には、少しだけ注意が必要である。現勢力においても潜勢力は保存され、現勢化によって完成されるという見方——思考の場合は「思考の思考」が現勢力の聖典でなく、潜勢力の完了した形象であるという見方——は、潜勢力に対する現勢力の優位という伝統的思考を問いに付す。ここまではよい。

そうであれば、潜勢力を保存・完成させるために現勢力へと移行することが大事だ、結局は現勢化することが大事だ、という話にもなるのだろうか。そうではない。重要なのは「現勢力へ移行する、とともに潜勢力が完成される」という結果ではなく、そのありかたである。非の潜勢力が現勢化するのには、「現勢力へと移行しないのではないことができる」という欠如的否定においてだった。したがって、「現勢力へと移行しないのではない」という必然性 (しないことができない) であっては、もはや潜勢力ではないのである。

さて、アガンベンは以上のような議論を通して、潜勢力と現勢力の関係を新たな仕方でも考えた。しかし、より精確にはアガンベンにとってそれらの関係とは、「関係 (relazione)」とは呼ぶことができないものである。前章で触れた「脱構成的潜勢力」を思考することは、「関係の身分そのものを問いに付し、存在論的關係がほんとうには関係でないような可能性に対して開かれた態度をとり続けていることを意味」していた。アガンベンは同じく『身体の使用』のエピローグで、非の潜勢力の欠如的否定によって潜勢力が現勢力へと移行するとき、潜勢力と現勢力は「もはや関係のうちにはなく、直接に接触している」と述べる。

詩人=制作者 (poeta) とは、制作の潜勢力を所有していて、ある時点で現勢化する決心をする者のことではない。潜勢力をもっているとは、実際には、みずからの非の潜勢力の勢力圏内にいるということの意味する。この詩的経験のなかでは、潜勢力と現勢力とはもはや関係のうちにはなく、直接に接触している。(UC: 376=461f.)

ここでは詩的経験が示されているが、すでに「思考の潜勢力」では、潜勢力の新たな解釈は「美学においては創造行為や作品のありかたを [……] 新たな仕方でも考察することを私たちに強いてくる」といわれていた (PP: 286=350)。また、前章で確認したように、音声

と言葉が接触する瞬間＝思考において、「詩と哲学はそれぞれが相手のなかに在る」。

言葉についての本来の意味においての詩的な経験は思考のなかで遂行され、言語についての本来の意味においての思考の経験は詩のなかで生起する。(CF: 44=47)

したがって、詩的な経験あるいは思考の経験において、潜勢力と現勢力は直接に接触している。もちろんこの「接触」もコッリが意味においてであって、思考が位置すべき「潜勢力と現勢力のあいだ」には、なんらの表象も介在しない。

以上のように、本章では「思考の潜勢力」の読解を通じて、アガンベンが非の潜勢力の現勢力という問題から、潜勢力と現勢力の関係を「関係なき関係」として把握するまでを見てきた。潜勢力は現勢力の下位に置かれるものではなく、むしろ潜勢力が現勢力へと移行するとき、そのうちに保存・完成される。詩的経験と同様、音声と言葉が接触する思考の経験において、潜勢力と現勢力は直接に接触するのである。思考はどのように起こるのか、あるいは起こっているのかという問いには、そのように応答することができる。

4 身振りとしての思考：到来する政治の主導概念

前章まで言語活動および潜勢力の観点から論じてきた「思考」は、アガンベンの政治哲学においても重要な概念である。本章では「パートルビー」を媒介項として、言語活動と潜勢力、思考の連関を把握することで、「思考」が「到来する政治の主導概念にして単一の中心へと生成すべきもの」(MF: 19=21)とまでいわれる所以を明らかにする。それによって、人が思考することの意義について重要な示唆が得られるだろう。

アガンベンによって真なる潜勢力、「純粹かつ絶対的な潜勢力」を体現する存在と目されるのが、筆生パートルビーである。アメリカの小説家メルヴィルの短編「パートルビー」の主人公である彼は、物語の語り手である法律家が構える事務所に筆生として雇われ、当初は熱心な働きぶりを見せていたのだが、ある日を境にすべての仕事をしなくなってしまう。アガンベンは、パートルビーが何か仕事を頼まれた際に決まって発するセリフ——「しないほうがいいのですが(I would prefer not to)」を「潜勢力の定式」と名付け

る(B: 61f.=42)。

その上で、同様にこの定式を論じているドゥルーズ、(フィリップ・)ジャヴォルスキの議論を参照しながら、潜勢力の定式は「潜勢力と非の潜勢力の不分明地帯」を開くものと述べる。

その地帯はまた、ここでの我々の観点からすると、何かである(何かを為す)ことができるという潜勢力と、何かでない(何かを為さない)ことができるという潜勢力とのあいだの不分明地帯だともいえる。(B: 62=43)

不分明地帯を開くとはどういうことか。アガンベンは、ドゥルーズが定式について「言語活動をあらゆる参照先から切り離す」と述べているのに導かれ、以下のように説明する。

それはまるで、前方照応という性格をもち、この定式を締めくくっている「to」が、現実の一切片を直接には参照せず、それが自らの意味を唯一引き出すことのできる先行する用語を参照するがゆえに、反対に自己絶対化して、一切の参照を失うまでになり、いわば文自体に向き直っているかのようである。自らへと戻り、現実の対象にも、前方照応の対象となる用語にもはや向かうことのない、絶対的な前方照応だ(「……しないほうがいいのをしないほうがいいのですが I would prefer not to prefer not to …」)。(B: 62=43f.)

すなわちこの定式においては、「to」は現実の何かを参照するのではなく、「I would prefer not to」という定式自体を参照することで、その前方照応は永遠に続く。アガンベンはこの定式に、古代ギリシアの懐疑論者たちが用いた「より以上ではない(ウー・マロン)」との類似性を見て取る。それについて彼らの言葉を借りながら、その表現は「肯定や否定といった意味で用いるのではなく、「言語活動を、これこれに関してしかじかを述べる(legein ti kata tinos)」という命題の域から、何について何を述べるのでもない告知の域へとずらす」のだという(B: 62-65=44-48)。

したがって、パートルビーは「(何かを)しないほうがいい」といっているのではなく、実は何もいっていないのである。「しないほうがいい」というのは、「することができる」という潜勢力に対して「しないことができる」という非の潜勢力を唱えるのではなく、両

者の不分明地帯を開くということである。

ここで想起されるのが、アガンベンが「言語活動の経験 (experimentum linguae)」⁹⁾と呼ぶものである。言語活動の経験とは、端的に言えば「人が話すという事実そのもの」「言語活動が存在するという事」を経験することである¹⁰⁾ (MF: 92=121; IS: XIV=13)。「しないほうがいいのですが」という謎めいた定式を口にするパートルビーは、何らかの意味内容を発しているのではなく、ただ「言語活動をあらゆる参照先から切り離す」のだった。これは「言語活動が存在するという事」の純粋な告知であり、パートルビーはただ「人が話すという事実そのもの」を経験しているとも考えられる。「パートルビー 偶然性について」では「言語活動の経験」に直接言及されないが、パートルビーは言語活動が存在することを目に見えるものにするという意味において、潜勢力を体現する存在と見なされる。

このような言語活動の経験は、純粋な手段性としての〈言語活動のなかにあること〉を露呈する点で、政治的な事柄でもある。

類的存在の経験 [=言語活動の経験] から生ずる第一の帰結は、あらゆる倫理、あらゆる政治を麻痺させている、目的と手段との誤った二者択一を打ち壊すということである。[……] 政治的経験において問題となるのは、より高度な目的ではなく、純粋な手段性としての〈言語活動のなかにあること〉(essere-nel-linguaggio) そのものである。[……] 手段性を露呈すること、手段それ自体をそのまま目に見えるものにするのが、政治的なことである。(MF: 92f.=122, 強調原文, [] 内引用者)

アガンベンは『目的のない手段』(邦題『人権の彼方に』)所収の「身振りについての覚書」で、「目的のための手段」たる制作(ポイエーシス)でも、「目的のない目的」たる行為(プラクシス)でもない第三種の行動として、「身振り(gesto)」を位置づける。身振りとは、舞踏が身体運動の手段的な性格を露呈するように、「ある手段性を晒しだすということであり、手段としての手段を目に見えるものにする」ことである。それゆえ、身振りは「目的と手段との誤った二者択一を打ち壊す」(MF: 51-52=62-64)。

単に人が話すという事実を経験し、帰結として「目的と手段との誤った二者択一を打ち壊す」言語活動の経験は、言語活動という手段それ自体を目に見えるものにする点で、身振りと重ねることができる。そして、

身振りとしての言語活動の経験とは、アガンベンにとっての哲学であり「思考」である。

そして、すべての偉大な哲学のテキストは、言語活動そのものを晒しだすギャグであり、巨大な記憶の穴のような、言語の癒しがたい欠陥のような、〈言語活動のなかにあること〉そのものである。(MF: 53=65f., 強調原文)¹¹⁾

以前にも言語活動の経験と思考の同一性を示唆していたアガンベンは¹²⁾、「〈生の形式〉」で「思考するというのは[……] 思考するという潜勢力を経験する」(MF: 17=18f.) という意味でもあると述べている。思考するとは単に思考することそれ自体を経験することであり、なにより言語活動とともにあるのだから、「思考」は言語活動のなかにあるという手段それ自体を露呈する身振りである。

アガンベンは「言葉を交流の手段と見なすなら」、言語活動のなかにあること、言語活動そのものを晒しだす思考の身振りは、「交流可能性の交流である」と述べる(MF: 52=65)。それゆえに、「思考」はアガンベンの政治哲学において特別な地位を占めるのである。

この思考、この〈生の形式〉こそが、剥き出しの生に暫定的に「法権利」という服を着せて剥き出しの生の代わりをしている「人間」と「市民」との手中に剥き出しの生を遺棄しながら、到来する政治の主導概念にして単一の中心へと生成すべきものなのだ。(MF: 19=21)

前章を振り返れば、このような「思考」は非の潜勢力の欠如的否定によって現勢化し、その潜勢力が完成されるのだった。そのとき、潜勢力と現勢力は直接に接触している。アリストテレス以来の存在論的装置は働かなくなり、潜勢力をもった生が実現される¹³⁾。そのような意味で、「思考」はしたがって、政治哲学が(ひいては教育哲学が)基礎とするべき「幸福な生」を可能にするのである。

[……]「幸福な生」とはまさに、「十分な生」、絶対的に世俗的な生のことであり、この生は、生そのものの潜勢力と交流可能性との完成にまで至っており、この生には、主権も法権利も手が届かない。(MF: 91=120)

5 おわりに

本稿の出発点は、教育においてその意義が曖昧にされてきた「考える」という所作を問い直すことだった。これまでアガンベンの思考概念を検討することで、思考とは何であり、どのように起こり、どのような意義があるのかという三つの大きな問いに応答する流れで論を進めた。

第二章では、言語活動の観点から「思考」を検討した。アガンベンが到来する哲学の任務として構想しているのは、動物の音声と人間の言葉を分節した上でその架橋を試みてきた伝統的思考に代わる、音声と言葉の接触の瞬間としての思考である。

第三章では、潜勢力の観点から「思考」を検討した。アリストテレス読解に基づくアガンベンの潜勢力論によれば、潜勢力は非の潜勢力の欠如の否定によって現勢化し、そのなかで保存、完成される。詩的経験、思考の経験は、潜勢力と現勢力が直接に接触する関係なき関係のうちに住まう。

第四章では、政治哲学の観点から「思考」を検討した。絶対的潜勢力たるバトルビーが発する謎の定式は、言語活動をあらゆる参照先から切り離す。純粋な手段性としての〈言語活動のなかにあること〉を晒しだす思考の経験は、目的と手段の二者択一を廃棄する身振りであり、幸福な生、潜勢力をもった生を可能にする。

本稿は個々の議論がそれぞれに意味をなし、何か結論めいたものを引き出すことを目的とはしていない。しかしながら、なんらの示唆も得ないことをしないことができるのなら、身振りとしての、目的のない手段としての「思考」、もとい思考を提示することができる¹⁴⁾。

最後に本稿の意義と今後の課題を簡潔に述べる。第一に、これまで論じられてこなかったアガンベンの思考概念に光を当てることで、アーレントなどを対象として盛んな教育学における思考論の展開に寄与することができる。「考える」を問い直すことは、特にこどものための哲学や道徳教育、シティズンシップ教育において重要である。西洋哲学の伝統を批判したアガンベンの思考は、例えば森田伸子がこどもたちの思考活動を〈てつがく〉と称するのを想起させる(森田2021)。目的に結び付かない純粋な手段という発想は、教育評価の分野などでも検討する意義がある。本稿をより具体的な教育実践に引き付ける仕事は、今後に残されている。

第二に、思考を切り口としたアガンベン思想のマクロな検討により、個性的な教育像が描かれてきた教育学におけるアガンベン受容の動向に、内在的な議論を補強することができる。今回は主として言語活動、潜勢力、政治哲学の観点から思考を論じたが、アガンベンの他なる主要テーマである歴史哲学(メシア論)の観点からは検討できていない¹⁵⁾。本稿は次なる思索へのプロローグである。

注

- 1) アガンベンの「思考」に着目したテキストには永井(2014)や酒井(2016)があるが、アガンベン内在的な検討はなされていない。
- 2) アガンベンが存在論的問題系の根幹に置きその乗り越えを目指す、言語活動を生ぜしめる「前提化(presupposizione)構造」についての詳しい検討は、中村(2019)を参照。本稿はあくまで思考概念の理解のために、必要に応じてアガンベンの存在論、言語哲学を参照するという性格をもつ。
- 3) アガンベンはあくまで、否定性に基づく西洋形而上学の伝統を〈声〉の思想として批判しているのであって、〈声〉と訣別するものではないということに注意されたい。〈声〉がアガンベンの主要モチーフであることについては、岡田(2011:145-162)を参照。
- 4) 「思考の終わり」における「声(voce)」は、音声の除去と意味の出現のあいだの場所である〈声〉(Voce)を指示するものではなく、単に除去される以前の音声のこと。人間は動物の音声(鳴き声)のような声、すなわち言語化される以前の「言いたいと思っていたこと」を(分節化された言語によって)言い表そうとしてきた。
- 5) [potenza]はイタリア語におけるdynamisの訳語であり、アガンベンの(特に政治哲学における)鍵概念としては「潜勢力」という訳語が定着している。アガンベン自身、dynamisが「力(potenza)をも可能性(possibilita)をも意味」し、「二つの意味をけっして別々に捉えてはならない」と述べている(PP:275=334f.)。「バトルビー」邦訳における高桑の訳注も参照(アガンベン『バトルビー 偶然性について』p.87,月曜社,2005年)。
- 6) 『形而上学』第九巻のこの一節に関しては、すでにハイデガーが従来解釈に疑義を呈していた。例えば、申田(2017:27-37)によるハイデガー解釈では、ハイデガーとアガンベンの解釈は若干異なる。関連して、アガンベンの著作では『開かれ』も重要。
- 7) アガンベンは「バトルビー」で、ライブニッツにおける様相の諸形象の定義を参照している。ライブニッツは、「存在することができない何か」を不可能なもの(⇔「存在することができる」可能的なもの)、「存在しないことができる何か」を偶然的なもの(⇔「存在しないことができない」必然的なもの)とする(B:71=58)。
- 8) 『形而上学』第十二巻(1074b 15-35)で展開されるこの議論を、アガンベンは「バトルビー」で参照している(B:54-56=26-30)。
- 9) 1980年代のアガンベンにおける「言語活動の経験」についての詳細な検討は原田(2019)を参照。以下で参照する『目的のない手段——政治についての覚書』(1996年)は『ホモ・サケル』と同時に執筆され、相補的な関係にある政治哲学の著作であり、「言語活動の経験」の政治的重要性が示されている。
- 10) 付言すれば、第一章では、「言語活動が純粋かつ単純に存在し

- ているという事実（ファクトゥム・ロクエンディ）」についての思考が、西洋哲学ではなおざりにされてきたことを確認した。
- 11) したがって、『目的のない手段』という著書自体が、アガンベン自身によって提示された〈言語活動のなかにあること〉という「目的のない手段」である、といってみてもいいだろう。
- 12) 『インファンティアと歴史』フランス語版（1989年）で追加された序文「言語活動の経験」において、「わたしたちが思考と呼んでいるものは、端的に言って、この〈言語活動の経験〉のことなのではないだろうか」と述べている（IS: XI=7f.）。
- 13) 「〈生の形式〉」で思考は「数ある生の形式を〈生の形式〉へと構成する単一的な潜勢力」（MF: 21=19）といわれるが、アガンベンの思想を踏まえないとただちには了解しがたい。これまでの本稿の議論によって、その意味するところが明瞭になったと思われる。
- 14) アガンベンは「思考のアイデア」（『散文のアイデア』所収）で、「引用符（””）で囲まれた言葉は、歴史の中で宙吊りになって」おり、「言語に対する裁判は、引用符の取り消しによってのみ終わらせることができる」と述べている（IP: 93-94）。これは「思考の終わり」における「言葉の中への声の宙吊りを終わらせる」ことと対応しているといえよう。
- 15) アガンベンの論文を集めた『思考の潜勢力』は「言語活動」「歴史」「潜勢力」の三章から成っており、この区分も念頭に置いて歴史哲学を挙げた。例えば、『残りの時』において「メシア的時間」を説明する際、言語学における「操作時間」の概念と類比している点などが注目される（TR: 65-68=106-111）。

参考文献

- [Agamben, Giorgioの著作]
- B (1993) = “Bartleby o della contingenza”, in G. Agamben & Gilles Deleuze, *Bartleby: La formula della creazione*, Macerata: Quodlibet, pp.43-85. (「バートルビー 偶然性について」『バートルビー——偶然性について』高桑和巳訳, 月曜社, 2005)
- MF (1996) = *Mezzi senza fine: Note sulla politica*, Torino: Bollati Boringhieri. (=『人権の彼方に——政治哲学ノート』高桑和巳訳, 以文社, 2000)
- TR (2000) = *Il tempo che resta: Un commento alla Lettera ai Romani*, Torino: Bollati Boringhieri. (=『残りの時——パウロ講義』上村忠男訳, 岩波書店, 2005)
- IS (2001) = *Infanzia e storia: Distruzione dell'esperienza e origine della storia* (Nuova edizione accresciuta), Torino: Einaudi. (=『幼児期と歴史——経験の破壊と歴史の起源』上村忠男訳, 岩波書店, 2007)
- PP (2005) = *La Potenza del pensiero: saggi e conferenze*, Vicenza: Neri Pozza. (=『思考の潜勢力——論文と講演』高桑和巳訳, 月曜社, 2009)
- LM (2008) = *Il linguaggio e la morte: un seminario sul luogo della negatività*, Torino: Einaudi (=『言葉と死——否定性の場所にかんするゼミナール』上村忠男訳, 筑摩書房, 2009)
- UC (2015) = *L'usage des corps; traduit de l'italien par Joël Gayraud*, Paris: Seuil. (=『身体の使用——脱構成的可能態のため
- に』上村忠男訳, みすず書房, 2016)
- CF (2016) = *Che cos'è la filosofia?*, Macerata: Quodlibet. (=『哲学とはなにか』上村忠男訳, みすず書房, 2017)
- IP (2020) = *Idea della prosa*, Macerata: Quodlibet.
- [その他の文献]
- 原田拓夢 (2019) 「初期ジョルジョ・アガンベンにおける「言語活動の経験」：一九八〇年代著作におけるインファンティア及び声の概念に着目して」『教育哲学研究』第120号, 教育哲学会, pp.96-114.
- Jasinski, Igor (2018) *Giorgio Agamben: Education Without Ends*, Springer.
- 小玉重夫 (2010) 「「無能」な市民という可能性」本田由紀編『労働再審 (1) 転換期の労働と「能力」』大月書店, pp.194-204.
- (2013) 『学力幻想』筑摩書房。
- 串田純一 (2017) 『ハイデガーと生き物の問題』法政大学出版局。
- Lewis, Tyson E. (2018) *Inoperative Learning: A Radical Rewriting of Educational Potentialities*, Routledge.
- 文部科学省 (2015) 「新しい学習指導要領等が目指す姿」(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm, 2021年9月21日情報取得)
- 森田伸子 (2021) 『哲学から〈てつがく〉へ! ——対話する子どもたちとともに』勁草書房。
- 永井領児 (2014) 「書評 小玉重夫『学力幻想』」『研究室紀要』第40号, 東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室, pp.291-294.
- 中村魁 (2019) 「「前提化構造」を超えて——ジョルジョ・アガンベンにおけるonto-logiaの問題」『ディアファネース——芸術と思想』第6号, 京都大学大学院人間・環境学研究所岡田温司研究室, p.111-139.
- 岡田温司 (2011) 『アガンベン読解』平凡社。
- 小野文生 (2021) 「経験とバトスのむすばれをめぐる思考——アレントとアガンベンとともに」『教育学のバトス論的転回』東京大学出版会, pp.369-452.
- 酒井崇 (2016) 「適応することと潜勢力としての思考」『現代思想』第44巻第17号, 青土社, pp.138-149.
- 鷺田清一監修, 高橋綾・本間直樹著 (2018) 『こどものてつがく——ケアと幸せのための対話』大阪大学出版会。
- (指導教員 小玉重夫教授)